

リアリズム文学研究会

Newsletter No.0

Feb. 2019

1. 例会報告

■ 6 月例会

夏の例会は2018年6月30日(土)に京都大学で開催され、國司航佑氏(イタリア文学/京都外国語大学)が「ジャコモ・レオパルディとリソルジメント」の題で、同時代の政治運動を踏まえて詩人の初期作品を再考する発表を、近藤梓氏(フランス文学/京都大学修士課程)が「カリカチュールとしての浮世絵」の題で、フランスにおける風刺画のあり方とジャンフルーの著作を紹介する発表をなさいました。また、運営に関して、例会の時期や発表テーマについての提案があったので、詳細は作成予定の会則案に反映します。昨年度末の公開研究会後は初めての例会となり、参加者数も多く、発表後の質疑もバラエティ豊かで盛況でした。(大北)

■ 11 月例会

2018年11月17日(土)、慶應義塾大学(日吉キャンパス)で当研究会初となる関東例会を開催しました。西嶋亜美氏(西洋美術史/尾道市立大学)の「絵画の流儀に任せてみるがいい」— ドラクロワのウォルター・スコット評価とその小説の絵画化」では、美術史の観点から大陸でのスコット受容に光があてられ、西尾(ドイツ文学/慶應義塾大学)の「国家と村の弁証法 — ベルトルト・アウエルバッハの「村物語」における「美化」の実践」では、当時の流行ジャンルがナショナリズムとの関連で検討されました。比較的人数ながら議論の密度は濃く、充実した会となりました。今後も皆様の積極的なご参加をお待ちしています。(西尾)

2. シンポジウム報告

2019年1月26日(土)、京都外国語大学に於いて、リアリズム文学研究会第一回シンポジウム「19世紀文学における田舎の表象」が開催された。当日は朝から雪の降る交通機関に甚だ不安が募る一日にもかかわらず、参加者も40名に達する盛会となった。今回のシンポジウムは、昨年2月に京都大学で開催された同研究会の公開研究会「19世紀文学とリアリズム — 共時的文学現象に関する文化横断的研究」の中で提起された問題の一つが出発点であり、昨年度の公開研究会の登壇者をはじめ、研究会のメンバーのみならず多方面からの参加を得られた。

司会挨拶、運営委員からの趣旨説明に続き、フランス文学から、大阪府立大学の村田京子氏による「ジョルジュ・サンドの田園小説における「田舎」の表象 — 農民像を中心に」、デンマーク文学から、大阪大学の奥山裕介氏による「世界を迎え、世界を見送る — ヘアマン・パング『路傍にて』における「駅の町」の近代」、



最後にアメリカ文学から、甲南大学の浜本隆三氏による「幻想の西部 — フロンティアとマーク・トウェインの田舎表象」という3つの発表がなされた。いずれも各国の時代および社会状況を十分に踏まえ、絵画や地図といった資料も充実し、個々の文学作品における田舎の表象を例示する非常に興味深い発表であった。

上記の3つの研究発表に続き、ドイツ文学の観点から福井大学の磯崎康太郎氏と、文学理論・テキスト言語学の観点から京都大学の田口紀子氏をコメンテーターとして迎え、より広い観点から個々の発表を捉え直す機会を得た。最後は全体討議に移り、フロアからも多くの刺激のかつ有益な質問があり、今後さらに検討すべき問題も明確化され、活発な質疑応答の場となった。(野田)

■ 発表を終えて

村田京子氏(フランス文学/大阪府立大学)

本シンポジウムでは、フランス文学、デンマーク文学、アメリカ文学という歴史や環境の違う領域における「田舎」の表象を探ったが、文学において「田舎」とは何を表すのか、じっくり考える機会となった。フランス文学の場合、政治・経済・文化の中心である首都パリとの対比のもと、「地方」が「田舎」として「停滞」「後進性」を象徴している。しかし、サンドの田園小説のように、「地方」の中でもブルジョワ社会と、旧弊な農民社会(「田舎」)が対峙するという二重構造となっている。デンマークの場合は、国自体がヨーロッパの「周縁」として言えば、「ヨーロッパの田舎」となり、国内では近代化の進む都市と田舎の中間に「駅の町」が存在していた。アメリカの場合、東部(＝都市)と西部(＝田舎)の対立となるが、トウェインの場合は牧歌的な田園神話を打ち崩すリアリストの視点が打ち出され、フィッツジェラルドの場合、西部の人間(ギャツビー、デイジー、トム)から見た東部、その居心地の悪さが描かれていた。このように「田舎」は様々な定義や切り口が可能な、面白いテーマだと改めて認識した。また、小説家が「田舎」を描く時、「語り手」の立場(農民側か文明側か)がどのようなものであるかも、それぞれの文学作品で違い、「語り手」の問題をもう少し深く追究してみたいと思っている。コメンテーターの先生方や、会場からの質疑応答で2時間にも及ぶ白熱したディスカッションとなり、大変有意義な時間を過ごすことが

できた。これも、リアリズム研究会のスタッフの方々のおかげだと感謝している。

奥山裕介氏（デンマーク文学／大阪大学）

デンマーク文学は代表的なテキストの多くが未訳ですので、どのように受け止められるか不安がありましたが、発表者の意図するところを好意的にお酌み取りいただき、また様々な角度から新たな問題点が掘り起こされ、大きな励みになりました。厚く御礼を申し上げます。

「駅の町」という近代化のトポスに舞台をとったバングの『路傍にて』のテキスト世界を省みるに、季節ごとの農事・祭事に根ざした地方生活の円環的な時間進行と、西欧近代に範をとった直線方向の歴史進行の交錯する場が「駅の町」であったといえるでしょう。そして、この小世界に流れ着いた一女性の懐旧や予感といった内面のドラマに焦点を当て、伝統的な生活サイクルと同時代的動向の両方から孤絶した室内画風の内閉世界を描出するところに、作品集『静物的存在たち』（1886）の創意の核心が見て取れるように思われます。

さらに、伝統的時間、歴史的時間、内的時間という上記3様の時間形態とは別に、第4の時間、すなわち宗教的永遠を暗示する記述も見逃せません。これに関しましては、キェルケゴールの『野の上の百合と空の下の鳥』（1849）やアンデルセン童話で語られる、地上の生と天上世界の断絶、および前者から後者への飛躍の可能性が、『路傍にて』でふたたび植物と鳥類の形象を借りて変奏されているというのが現在の見立てですが、いずれ機会を改めて議論したいと思います。

浜本隆三氏（アメリカ文学／甲南大学）

「田舎」表象の多様性に気づかされるシンポジウムであった。発表では、アメリカの西部開拓の歴史をたどりながら、絵画や文学作品の紹介を通して、フロンティア開拓のはじまりから消滅までを追い、とくにマーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』と短編「ハドリバークを墮落させた男」を取り上げて、19世紀アメリカにおける田舎表象の変遷を追った。

アメリカ研究の文脈では、「田舎」は西部フロンティアが開拓される途上にあり、いわば自然と文明の中間地帯というシンプルな認識のもと発表に臨んだが、村田・奥山両氏のご発表を拝聴し、また、フロアから質問を頂戴するなかで、歴史あるヨーロッパの文学に描かれた、単純な二項対立の枠には収まらない文化的・時間的に濃密、かつ複雑な田舎像に気づかされた。トウェイン流に言えば「旧世界の文学」の奥深さを再認識させて頂く機会となった。

19世紀、西部フロンティアは、移民にとってアメリカのソフト・パワーの源泉であった。トランプ政権が誕生し、混乱を極めながら保守化・右傾化する現代のアメリカは、かつて世界を魅了した「アメリカン・ウェイ・オブ・ライフ」というソフト・パワーに陰りが生じ、岐路に立っているように思える。今回の発表は、現代のアメリカを考えるために必要な、歴史的座標軸を確保するうえでも、意義深い機会となった。ご準備にご尽力下さった皆様に心より感謝申し上げます。

■ 実行委員から

問題が起こるたびに多くの人に助けられ、結果的にいつも事態が好転して当日までつながった今年度のシンポジウムでした。知的好奇心の尽きなさと共に、築いているつながりが研究会の財産だと思います。（大北）

多くの方の協力を得て、充実した内容のシンポジウムとなったことを嬉しく思います。多謝。当日を迎えるまではあれこれ予想外の出来事も起こってヒヤリとしましたが、今はホッとしています。（霜田）

多方面のご尽力を得て盛会となったことに深く感謝しています。運営面での反省点は多々残りますが、自分は発表せずに裏方に徹する楽しさも実感させていただきました（そろそろ自分の研究も頑張らねば……）。（西尾）

先日シンポジウムでは、こうした大きな集まりでは自身初の司会ということで、緊張しておりましたが、多くの方々の協力のおかげで、何とか大きな問題もなく最後まで役目を果たすことができました。ご参加くださった皆様、改めまして御礼申し上げます。（野田）

3. 総会報告

2019年1月26日（土）、シンポジウムに先立って第1回総会がおこなわれました。まず、シンポジウム実行委員（以下、実行委員）より、研究会の活動記録として年度毎に会報を発行する案が提案され、その詳細について協議されました。協議の結果、この提案は可決され、さらに、発行頻度は原則年1回とすること、作成はその年の実行委員が分担すること、紙媒体ではなくPDFファイルでメーリングリスト配信とすることが決定されました。続いて、同じく実行委員より、現在Google Sitesを利用して運営されている研究会ウェブサイトを将来的にリニューアルし、研究会内部での情報共有だけでなく対外向け広報としても活用していく方針が提案され、また、これまで研究会外部には非公開としてきた現ウェブサイトを手で試験的に一般公開していることが報告されました。この2点について、大筋での異議はありませんでしたが、一般公開にあたってはウェブサイトに掲載している各種資料の権利関係を明記するなど、何らかの保護措置が必要ではないかとの意見が寄せられました。これを受けて、ウェブサイトのリニューアルまでは資料の公開範囲を研究会メンバーに限定すること（翌1月27日付で対応済み）、またリニューアルに際してはあらためてその詳細を総会に諮ることで一致しました。最後に、総会参加者より、将来的な組織拡大などに備えて正式の会則を設け、あわせて会員名簿も作成すべきではないかとの提案がなされ、多くの賛同を得て可決されました。そのうえで、会則の詳細については後日実行委員がその原案を作成し、その審議のための臨時総会を2019年6月例会にあわせて開催することで一致しました。（この会則原案については、近日中にメーリングリストを介して研究会メンバーの皆様へ回覧する予定です。ご一読のうえ、ご意見がおりの方は6月の臨時総会にご出席いただくか、研究会メールアドレス宛てにお知らせください。）（西尾）

発行日：2019年2月15日

発行者：リアリズム文学研究会

E-Mail：realisminliterature@gmail.com

* 編集担当：大北彰子、霜田洋祐、西尾宇広、野田農